置などを併用し大臼歯を遠心移動することにより，多くの空隙が獲得でき側貌の改善も出来ると示唆された。

13）歯学部1学年における早期病院体験学習（Early Exposure）の効果

○山崎　信也，池嶋　一兆，小林　康二
渋澤　洋子，三田　　明，松山　仁昭
島田　敏尚，鎌田　政善，天野　義和
（奥羽大・附属病院・体験学習担当）

（緒　言）低学年のうちに，実際の臨床や仕事現場を見学または体験させる教育概念をEarly Exposureと呼んでおり，教育上有用と報告されている。今回，当大学でも歯学部１学年に病院体験学習を導入したので，概要とアンケート結果を報告する。

（方　法）対象は１学年106名で，期間は平成15年４月から約３ヶ月間であった。時間は木曜日，金曜日の４時限目で，回数はEクラス11回，Dクラス11回とした。学習診療科は一般歯科第１診療室，一般歯科第２診療室および口腔外科が約10人×２回とし，小児歯科，矯正歯科，放射線科，初診科・歯科麻酔科については約５人×１回とした。学生・教員に対してアンケートを試行した。

（結　果）全体で出席率は93％と良好であった。学生アンケート結果では，１）興味が持てた（TBI，義歯，インプラント，病棟，外科，矯正，実習，子供，現像，CT，問診，全身麻酔，手術室など）。２）自覚が持てた。３）学問の重要性を認識した。４）見学されるのは患者にとって良い気がしないのではないか，診療室が暑いのではないか。５）患者が少ないのではないか。などの意見が見られた。

教員へのアンケート結果では，１）良い試みである。２）毎週（22回）は大変であった。３）時間帯を考慮すべき。４）少人数でじっくり見せたい。５）上に立つ教員から指導を体験して欲しい。６）身だしなみの悪い学生がいたが，教員の手前注意しにくい。などの意見が見られた。

（結　論）他大学でのEarly Exposureでは，病院のみならず老健・障害者施設でボランティアを行わせたり，体験学習後に学生による全体討議を行わせたり，体験学習報告書を作成するなどの報告が見られる。本大学においては，多少カリキュラムに改善余地はあるものの，１学年時の病院体験学習は自覚形成において有用であると思われる。また，１学年時の病院体験学習が以後の学習成果へ与える影響なども検討していくべきと思われる。

14）歯肉癌を疑った辺縁性歯周炎の一例

○中戸川倫子，宮島　　久，馬庭　暁人，強口　敦子
平野　千鶴，大友　友昭，古田　摂夫，大溝　裕史
（会津中央病院歯科口腔外科）

辺縁性歯周炎は歯周組織の辺縁部の歯・歯肉接合部から発生する炎症性歯周疾患であり，進展すると歯周組織の支持構造を破壊し，歯の動揺や脱落をきたすようになる。一方，歯肉癌の中には歯槽突起深部から発生し，抜歯や歯肉切開を契機として歯肉に発現する歯周炎型歯肉癌と呼ばれるものがある。今回，演者らは歯周炎型歯肉癌を疑った辺縁性歯周炎の一例を経験したのでその概要を報告した。

症例は30歳の女性で，右側頬部の腫脹と疼痛を主訴に当院耳鼻科を受診し，歯性疾患との鑑別を目的に当科紹介となった。初診時，右側上顎犬歯部に歯肉の増殖性腫脹を認め，局所的な高度の骨吸収像を呈し浮遊歯の状態であった。鑑別疾患として悪性腫瘍の２次感染，腫瘍類似疾患，良性腫瘍，歯性感染症，他臓器からの骨転移などを疑った。消炎後，症状がほぼ消失したため，歯性感染症と診断し，原因歯の抜歯および周囲の病巣を摘出，念のため，病理検査をおこなった。その結果，悪性腫瘍が疑われたが，口腔病理医に再確認した所，歯周炎の診断であった。

本症例において診断に苦慮した点は，初診時の局所所見が腫瘍性増殖を疑わせ，画像所見からも骨吸収の状態が虫食い状であったため悪性を疑わせたことである。結果的には，咬合性外傷により辺縁性歯周炎が増大したものと考えられた。

慢性辺縁性歯周炎の歯槽骨吸収像と歯周ポケット内部に発生した歯周炎型歯肉癌による歯槽骨の浸潤の形態は，比較的類似しており鑑別診断が困難であることが多い。そのため，日常の臨床において，歯周炎との鑑別診断として歯周炎型歯肉癌